

## 音ハ楽シ

三五回生 石井 庸三

千里山会に入会して三年目になった。秋に行われる総会後の懇親会では、合唱団のリードで出席者全員が、千二小に通っていたことを思い出しながら愉しげに合唱している。私も声を張り上げて、昔を思い出しながら歌わせて頂いた。懇親会への出席が切っ掛けで、私が音とふれあったのは、いつの頃だったか思い出してみた。

物心ついたとき、四歳年上の姉はピアノを習っており、我が家にあつた足踏み式のオルガンで『ブラスカ、ブラスカ』音を出していた。姉は三歳の私に、オルガンを教え始めた。

四分音符で、ド、ド、レ、レ、ミ、レ、レ、ド、ミ、ミ、レ、レ、ド(全音符)の四小節である。これに歌詞

を付けて『犬コロご飯だワンと啼け』と言う具合に教えられたのである。

この頃は、テレビなんて、想像もつかなかった時代である。寝る時間になると、親父が家に居る時には決まって『月夜の田圃でコロロコロロコロコロコロコロ鳴く笛は・・・』と、子守歌代わりに「蛙の笛」を歌ってくれた。五〇年以上も過ぎた今、はっきりと覚えていて。母親と寝るのは当たり前だったので、何を歌ってくれたのか、多分『坊やはよいこだ ねんねしな・・・』だったような・・・。

### 音楽との出会い

#### 1. バイオリン教室

姉の影響もあつたのか、小学校に入学してすぐに、阪急千里山線花壇町駅にあつた「千里山バイオリン教室」に通うことになった。同級生も数人通っていた。

天神橋の大塩楽器店で、八分の一の小さなバイオリンを買ってもらった。教室へは、片道五円の薄い紙でできていた切符を買い、大学前―花壇町と、たった二駅ではあつたが、知らない町に行くと言う、冒険心で

ワクワクしながら通ったように記憶している。省線の切符は、厚いボール紙だった。私と楽器が触れ合った時である。五年程通ったバイオリン教室は、なぜか辞めてしまった。今思えば返す返すも残念である。

## 音楽への序章

### 2. ギター

バイオリン教室を辞めてしまい、手許にある楽器は、縦笛、ハーモニカ、オルガンだけになってしまった。

私が吹田一中に入学したのが、東京五輪の年、一九六四年（昭和三九年）である。

テレビ、ラジオはオリエンピック一色だったが、音楽番組から流れてきたのが、テケテケサウンドであった。ザ・ベンチャーズの軽快なエレキサウンドである。

この頃、親父が『禁じられた遊び』のシングルレコードを買ってきた。エレキサウンドと『禁じられた遊び』のレコードに夢中になった私は、ギター入手計画を実行した。なんのことはない、ただ、誕生日に買ってもらったことである。

これもまた、親父に連れられて、天神橋の大塩楽器

店に行き、クラシックギターを買って貰った。ギターの知識なんか皆無であったので、店員に勧められるまま購入した全音社製のギターには、スチール弦が張ってあった。

嬉しくて嬉しくて、毎日練習した。バイオリン教室に通っていたからか、幸い楽譜は読めたので、一年程練習したら、『禁じられた遊び』の触り位は弾けるようになったのである。但し、スチール弦だったので指先は罅割れのようになったことは言うまでもない。

楽に弦を押さえられるガット弦の存在を知ったのは、この頃である。

しかしエレキギターへの憧れは、まだまだ冷めてはいなかった。

オープンリールのテープレコーダー用マイクを、ギターのサウンドホールに入れて弾くとスピーカーから流れてくる音は、エレキギターのそれに近い音になる。『禁じられた遊び』そっちのけで、毎日毎日テケテケを弾いていた。

中学三年の頃は、フォークソングやグループサウンドに目覚め、毎日毎日、勉強なんかそっちのけで、ギ

ターの練習に明け暮れた。

後に、「音楽」が「音我苦」になるとも知らずに……。

### 3. ピアノ

私が高校三年生の時、姉が航空会社に入社した。

初めてのボーナスだったと思うが、カワイのアップライトピアノを買った。

四畳半だった姉の部屋に鎮座したピアノ。姉が居ない時は、私の遊び道具の一つになった。

慕情やオーバーザレインボーなどの映画音楽、オールオブミーや、嘘は罪などのJAZZ、挙げ句の果ては、歌謡曲まで弾きまくった。と言っても、指の運びなんかはメチャクチャである。ギターのコード（和音）を鍵盤に置き換えて、全くの我流で弾いていたのである。和音の理論なんか、関係なしにである。

ピアノを覚えたことも、後に「音我苦」になってしまった。

### 4. バンド

千里万博の一九七〇年（昭和四五年）、姉が勤務している航空会社では、ジャンボジェット（B747）機を導入することになった。ジャンボジェット機導入の

際、姉は会社のPR業務で西日本を受け持ったと記憶している。

デパートの屋上や、イベントスペースPRの司会をしたようだ。ハワイから少女達のフラダンスのチームを招き、バックバンドは「大橋節夫とハニーアイランドス」である。

数ヶ月後PRの仕事も終わり、バンドが出演している「銀座タクト」へ姉に連れられて行った。バンドのメンバーを紹介してもらうためである。

メンバーを紹介してもらってからは、当時赤坂檜町にあったハニーアイランドスの事務所に予備校もそっちのけで通い詰めた。

当時プロのギター弾きを目指していたからだ。でも、誰も、何も教えてくれない。

押し掛け坊やIIバンドボーイ（楽器運びやセッティング）になり、「銀座タクト」、「銀座マーメイド」の舞台の袖から、ギターを担当していたNさんの指を見ていた。盗んでいたのだ。

名ギターリストのNさん曰く、

「石井、お前プロになりたいんだってな、プロってい

うのはな、嫌な曲でも弾かなきゃいけないんだぞ」  
って、しみじみ言ってくれたことがある。

この言葉を忘れずに覚えていれば、音我苦にならなくて済んだのに。後悔!

「銀座タクト」中二階の下手側、ステージではNさんが下手でギターを弾いている。目の前にはグランドピアノ、Nさん、イントロ、間奏、エンディングでは、ギターを背負いながら、ピアノを弾くのである。

格好良い! 憧れた! 俺にも出来ると思った。実にミィハー的な発想である。

このバンドとの出会いも、後に「音我苦」になるのである。但し、Nさんとは三〇年以上も家族ぐるみで、お付き合いをさせて頂いている。

## 5. 毎日が音我苦

大学生生活、そしてサラリーマン。と言っても、テレビ番組やイベントの制作会社である。たった四年間だけのサラリーマン生活である。

一九七九年(昭和五四年)、二年前結婚していた私は、妻にも相談せずに退職してしまった。フリーのプロデューサー兼演出家として独立したのはよいけれど、如

何せん仕事がない。

そこで思いついたのが、夜の巷でピアノを弾くことである。当時、クラブやパブの客は、カラオケではなく、生ピアノの伴奏で歌うのが常であった。「好きな音楽で稼げるぞ!」と思って勇んでいたが、一日にして失望へと変わった。演歌や歌謡曲の伴奏である。

俗に赤本という「歌謡曲のすべて」譜面集」を小脇に抱えて、店から店へ移動するのである。夜の七時から、深夜の三時三〇分まで。

まさに「音我苦」以外のなにものでもない。

仕事もある程度ではあるが軌道に乗り、ピアノ弾きは辞めてしまった。

一九八一年(昭和五六年)、姉に紹介してもらっていた、大橋節夫とハニーアイランダーズの名ギタリストのNさんは、独立して自分のバンドを結成して活躍していた。仕事が暇だった六月のある日、Nさんから突然電話をもらった。

Nさん「石井、釣りに行かないか?」

石井「いいですねえ。どこに?」

Nさん「箱根だよ。」

## 音ハ楽シ再び

### 6. 現在<sup>いま</sup> 音我苦から音楽へ

十九年前からライフル射撃を始め、拳銃射撃を経て、クレー射撃では国体に出場するほど、射撃にのめり込んでいった。たまにピアノは弾くものの、楽器のことは殆ど忘れていた。

五年程前である。八王子に住んでいる高校時代の親友から電話がかかってきた。

自分が結成したアマチュアバンドを教えて欲しいとのこと。歯医者も八王子まで通っていることだし、断る理由もないので、歯医者への帰りという条件付きで引き受けることにした。

何回か、アマチュアバンドを教えているうちに、音への楽しみを思い出してきたのである。

親父が歌ってくれた「蛙の笛」。

母親が歌ってくれた「子守唄」

姉が教えてくれたオルガン「犬コロ」飯だワンと

啼け」。

石井「箱根って言うと、芦ノ湖ですね。」

Nさん「芦ノ湖もそうだけれど、山を降りれば海もあるぞ。」

石井「是非、お願いします。」

Nさん「七月一日の朝、新宿西口の地下な、時間は連絡するよ。あとそれから、ギター持つてるよな、エレキ・・・」

石井「はい。レスポールなら持つてるけれど・・・」  
Nさん「レスポールならOKだ。ギターも持って来いよ。忘れるなよ。」

石井「?????!!」

Nさんに倅められたのである。自分のバンドのメンバーが抜けた穴を、私が埋めたのである。箱根で一ヶ月、伊東で二週間、銀座のクラブで一ヶ月、Nさんのバンドでギターを弾いた。バンドの仕事は夜だったから、自分の本業には差し障りはなかったが・・・。ピアノ、ギター、バンドと、音楽が音我苦になってしまった。

好きでもない音楽を演奏するって、物凄くストレスが溜まり、苦痛になっていく。

ギターを始めた頃。ピアノを我流で覚えた頃 e t c。  
音を楽しむ道に引き戻してくれた八王子の親友は、  
一昨年の夏に自宅の目の前で、大型オートバイに撥ね  
飛ばされて急逝した。

音楽と射撃、二つの共通した趣味を持っていた奴で  
ある。亡くなって五日後、彼が受けていた結婚披露宴  
の出演では彼の代わりに三〇年振りドラムを叩いた。  
現在、自分でもアマチュアバンドを結成して、月に  
一〜二回だが練習している。

私が仕事として演奏してきた J A Z Z でも、歌謡曲  
でも、ハワイアン、カントリー & ウェスタン、色々な  
ジャンルの音楽をプロのミュージシャンに混じって演  
奏している。但し、ギヤラは無しで、銀座スエヒロの  
ステキー一枚が条件である。

余談になるが、この会誌が皆さんの手元に届く頃、  
銀座 Y 楽器店から、スチールギター用のバー（左手に  
持って、弦を擦る金属製の棒）が発売されているだろ  
う。私がアトバイスをして製作したものである。

アマチュアだから、アトバイス料は一切ない。バー  
の現物支給だけである。楽器を購入する際の特別割引

はあるが・・・

私が音楽から離れている時にも付き合っていた音楽  
家（編曲家）の友人曰く、

「石井さんは良いよねえ、音を楽しんでいるものねえ。  
僕なんかは、音に苦しめられているものなあ」って。

六月二四日、中国の大連でステキー屋を開店した。  
美国西部牛排という名の、アメリカンスタイルの、  
ステキーハウスである。

もちろん店内にはギターを置いている。私が居る時  
には、BGMとしてブルースを弾いている。  
私にとって、音楽とは切っても切れない縁があるよ  
うだ。

映画評論家の水野晴郎風に、

「いやあ、音楽って本当にいいもんですね・・・」

お終い